

道真さまとニワトリ

むかーし、むかし、千百年余りむかし。

菅原道真さまが大宰府の副長官として、都からおいでになる時のことです。

長い旅をしてあと一日で大宰府へ到着するという前の日、

こっそり次郎丸という村に泊まることになりました。

「おーい、道真さまのこらっしゃったぞ。」

道真さまは、後に学問の神様となられるほど頭の良い人でしたが、

人に陥れられて都を追われたのです。

家来たちは必死で道真さまを守りながら、やっとここまで来たのです。

「このような草深い村に我らが泊まるとは誰も思うまい。さあ村長（むらおさ）の家にご案内いたします。」

「いや、ここでよい。もう一步も歩けぬ。」

道真さまは、崩れ落ちるように座り込んでしまいました。

「おいたわしいこっちゃん。こげなニワトリ小屋ん近くに泊まらっしゃあなんち。」

「そうたい、村んもんがみんなじお守りしゅうたい。」

「おりゃあ、村ん入り口で見張り番するけん。」

「よし、わしゃ、四辻ん木ん上から目え光らしちよく。」

疲れきった道真さまや家来たちを守ろうと、村長はじめ村人たちは一晩中起きて、道真さま一行の泊まった家を取り囲んでいました。

「おーい、悪もんどんが来よるぞ！」

「ひゃーっ、そら大ごっちゃんあ。どげんしようかい。」

どうやら追っ手が近づいたようです。早く大宰府に向かわねば命が危ないとも思われました。

しかし、村人は恐れ多くて声もかけられません。何よりぐっすり眠る道真さまたちを起こすには忍びなかったのです。

「あー、くたびれ果てちやるが、どげんしたらよかろうかい。ええい、はがゆいのう。」

「村長どん、もういかんばい。悪もんが村に入りよる。」

刻一刻と危険は迫っていました。

「うーん、よし決めた！ニワトリどんに頼もう。」

「は・・・ニワトリ？」

「さあみんな、お湯を沸かすんじゃ、急いでのう。」

村人たちは熱湯を持ってニワトリ小屋に駆け込みました。

そして、ニワトリが止まっている竹の止まり木に、一斉にお湯を流し込んだのです。

「コケーッ、コ、コ、コ、コ、コッコウ！コケ、コケー、コケー！」

いきなり足下が熱くなったニワトリたちは、バタバタ、バタバタ飛び上がって大騒ぎです。

「うーん、おお、もう夜明けか。」

道真さま一行は目を覚まし、早々に旅立っていかれました。

そして無事、任地の大宰府に到着されたのでした。

このお話の舞台は、福岡市早良区有田。道真さまが次郎丸村の人々の心遣いをご存知だったかどうかは分かりませんが、

村には今もこんな民話が語り継がれています。